背骨，肋骨，頭，顔，歯，嘴，翼など），第10章は植物の構造に関する用語（木，草，潅木，羊歯，穀物，根，幹，茎，枝など），第11章は環境に関する用語（太陽，月，星，光，夜，季節，夏，秋，冬，空気，大地，海など），第12章は動物の行動に関する用語（愛する，遊ぶ，集まる，歩く，争う，動く，泳ぐ，さ迷う，飛ぶ，鳴くなど）である．魚類の種に関してもかなりの用例が記されているが，ここでは省略する．

さらに「囲み記事」が119編と，図が345枚ある．囲み記事は学名にまつわるエピソードや，これまでの学名に関した本に関するコメントが記されている．読んでいるうちに，学名の知識が身についてゆくと思う．多くの図は学名の理解を助けてくれる．

本書の最初に，著者は「読み物として通読していただきたい」と述べている．任意の章を選んで通読してください，と述べている．しかし，著者の本意は初めから終わりまで通読してください，ということであろう．要するに，学名の海を泳ぎなさい，ということである．本書は調べる辞典としてだけでなく読む辞典としても編まれている．西洋語にはギリシャ語やラテン語から派生した語が多くあり，西洋人にとって学名は親しみやすいし，意味も把握しやすい．しかし，日本語は西洋語と異質である．日本人にとって学名が親しみにくく，意味もわからないのはあたりまえである．理屈もなにも知らず，ただ，論文や図鑑で意味もわからないながら学名に親しんでいる者が，本書の通読という作業をやれば，学名の習得という結末に至る．しんどい作業であるが，読者が学名習得への努力をぶつける対象として，日本語では本書に比べるものがない．類書がないのである．辞典とはいいながら，学習書である．そして，この学習を通り越せば，読んで楽しめる本になるであろう．これこそ，著者の本書に籠めた思いである．すごい本だと思う．

著者，平嶋義宏博士は昆虫分類学者であり，学名に関する著書が6冊ある．いずれも，著者の該博な知識によって著されており，学名に半可通の日本の生物学者に大変な助けになっている．平嶋博士は昆虫分類学者で博物学者であった江崎悌三博士の高弟であり，九州大学昆虫学教室の分類学の伝統をしっかり受け継いでおられる．本書はその学問の継承から生まれたといえる．本書をみていると基礎的学問である分類学の継承の重要性をあらためて認識させられる．生物分類学者はもちろんのこと，生物学者は座右におきたい書物である．生物関係の研究室をもつ機関では図書室に必ず備えるべきであろう．

（中坊徹次　Tetsuji Nakabo：〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学総合博物館　e-mail: nakabo@inet.museum.kyoto-u.ac.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
54(2): 241-242

□ 魚類学

海の動物百科2，3　魚類I, II. —松浦啓一（監訳）．2007．朝倉書店，東京．海の動物百科2（魚類I）：vi+73+15 pp. ISBN978-4-254-17696-4．4,200円（税別）；海の動物百科3（魚類II）：vi+76+15 pp. ISBN978-4-254-17696-4．4,200円（税別）．本書は2004年に発行されたThe New Encyclopedia of Aquatic Life（Andrew Campbell・John Dawes編）の訳本で，日本語版の本シリーズは哺乳類1巻，魚類2巻，無脊椎動物2巻の5巻で構成されている．本書はこのうちの魚類に関する2巻で，魚類Iは監訳者の松浦啓一氏が，魚類IIは当時国立科学博物館支援研究員であった渋川浩一氏と北海道大学の今村央氏がそれぞれ翻訳を務めた．本書は概論のほか，概ね上目程度の分類群に分けて，主として科あるいは亜科単位で分類や形態，および生態などについての情報が記述されている．また，興味深い話題については，本編とは別枠のコラムとして掲載されている．魚類Iには概論および無顎類，条鰭類の軟質類から骨鰾類を除くヒメ目・ハダカイワシ目までが掲載され，魚類IIには骨鰾類，側棘鰭類，スズキ型魚類，ヨウジウオ類，キンメダイ類がならび，以下シーラカンス，肺魚，軟骨魚類と続いている．この特異的な配列は，監訳者が序でも記しているように，無顎類－軟骨魚類－肉鰭類－条鰭類といった順序に慣れ親しんでいる読者にとっては，いささか奇異に感じられるだろう．しかし，このような配列は別にしても，本書の内容，特にあまり日本では知られていない分類群についての分布や生態学的な情報はたいへん興味深く，また挿入されている写真も見応えのあるものが多い．このように本書は雑学的要素も含めて，世界の魚類に関する幅広い知識を得るには最適の2冊である．（本村清志）

魚類学実験テキスト． —岸本浩和・鈴木伸洋・赤川　泉（編著）．2006．東海大学出版会，秦野．130 pp. ISBN4-486-01723-4. 2,500円（税別）．本書は「外部形態の観察」，「魚体の測定方法」，「内部形態の観察」，「種の同定」および「魚類学実験の周辺」の5章から構成される．1章から4章まではもっぱら形態学的な記述が占め，その他，生態学ないしは分子生物学の分野は最終章とそこここに折り込まれている「コラム」で若干とりあげられているにすぎない．したがって，本書の本領は形態観察のガイドにある．骨格系はオリジナルな図が多用され詳説されているが，筋肉系については鰓弓部等の解説がなく，ややバランスを欠く．また，成魚が中心にあつかわれ，卵・仔稚魚についての解説記事は僅かである．形態を個体発生と系統発生の流れにのせ，動的に演出する一工夫があれば，学生の理解はさらに深まると感じた．（佐々木邦夫）

□ 生態学

水田生態工学入門． —水谷正一（編著）．2007．農山漁村文化協会，東京．204 pp. ISBN978-4-540-06122-6．2,900円（税込）

本書のタイトルの前に，「農村の生きものを大切にする」という副題が付けられている．水田や農業水路などは人為的な環境でありながら，多くの淡水魚にとってかけがえのない生息場所となってきた．その生物多様性が失われつつある現在，稲作と様々な生物の保全をいかに両立させるかが大きな問題となっている．編者を中心に12名の執筆者が，水路と水田の生態系のほか，環境修復技術や環境保全工法について最新の興味深い成果を紹介している．水田－水路の環境問題は，日本魚類学会でも大きな関心を集めている．農業関係の学会との交流は日頃ないので，水田生態工学についても研究成果を聞く機会はあまりないように思われる．そういう意味でも，本書は魚類学会の会員に広く読まれる価値がある．実際には，水田や水路を昔のままの形態に保つことも重要であり，本書で提案されている工法については異論もあるかもしれない．それでも様々な意見を提案し，議論することによって，水田生態工学は進展する．本書には，このほか興味深いイラストや写真が多く掲載されており，文章も読みやすい．一読を勧める．

（片野　修）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
54(2): 242–243

新知見紹介

伊勢湾における絶滅危惧種キセルハゼの採集記録

A record of the endangered goby, *Gymnogobius cylindricus* from Ise Bay, Mie Prefecture

図1. キセルハゼ *Gymnogobius cylindricus*（FRLK 070081，標準体長45.8 mm）．三重県伊勢湾．

キセルハゼ *Gymnogobius cylindricus* (Tomiyama, 1936) は河口干潟や前浜干潟の軟泥底に生息するハゼ科ウキゴリ属魚類で，環境省版レッドデータブックでは絶滅危惧IA類に指定されている（鈴木，2003）．本種はこれまで瀬戸内海（兵庫県，岡山県，広島県，愛媛県，山口県），有明海（福岡県，佐賀県），日本海（福岡県）から記録されており（鈴木ほか，2006；山口県，2007：http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/press/200702/006187.html），日本固有種と考えられている (Stevenson, 2002)．これまで，伊勢湾では三重県宮川（建設省河川局河川環境課，1997）と三重県雲出川（建設省河川局河川環境課，1998）からの記録がある．しかし，採集個体の形態の記載と図がなく，標本の所在も不明であり，クボハゼ *G. scrobiculatus* が誤同定された可能性も指摘されている（鈴木ほか，2006；橋本・内山，2006）．

筆者らは2007年3月6日に，伊勢湾に流入する三重県の揖斐川河口においてキセルハゼ（図1）を採集した．分布が問題視されてきた伊勢湾における標本に基づく記録として，また本種の分布東限として重要な知見であるので，採集場所の環境と標本の形態的特徴を併せて報告する．

採集場所は三重県桑名市揖斐川の河口干潟である．干潮時にタモ網によってキララハゼ属の1種 *Acentrogobius* sp.［鈴木ほか (2004) でスジハゼAとされているものと同一］，エドハゼ *G. macrognathos* と共に2個体が採集された．採集場所の平均潮位時の水深は約150 cm．底質は泥で，アナジャコ上科のものと思われる生息孔が多数見られ，アナジャコ *Upogebia major* の脱皮殻がしばしば網に入った．採集時の塩分濃度は26.3 pptであった．

採集された2個体は，九州大学大学院生物資源環境科学府附属水産実験所に登録した (FRLK070081, FRLK070082)．

FRLK070081では，体長45.8 mm，第1背鰭棘数6，第2背鰭棘数1，第2背鰭軟条数12，臀鰭棘数1，臀鰭軟条数9，頭長／体長比27.0%であった．FRLK070082では，体長39.5 mm，第1背鰭棘数6，第2背鰭棘数1，第2背鰭軟条数12，臀鰭棘数1，臀鰭軟条数9，頭長／体長比27.8%であった．また2個体ともに，上顎後端は前鰓蓋骨後縁付近に到達し，上顎が下顎の前方に突出し，前眼肩胛管はC′–F′間に限られ，開口Dは単一で，体側および尾鰭の上部2/3にしか目立った斑紋がなく，頤の皮弁は後方につながり，臀鰭は第2背鰭第3軟条より後方で始まり，背鰭前方と項部に鱗をもっていた．これらは鈴木ほか (2006) が近似種とキセルハゼを区別する上で重要とした特徴である．

本種が瀬戸内海，有明海，日本海だけでなく，伊勢湾にも分布することが明らかになった．本記録は本種の分布東限を大幅に更新するものであり，本種の分布域形成過程を考察する上で重要な知見である．伊勢湾や伊勢湾の一部である三河湾にも本種の生息が可能と考えられる干潟が多く存在しており，今後これらの地域で本種の新たな生息地が発見される可能性が高い．